

教育実習改善のための取組とその展望

—教育実習及び事前事後カリキュラムの開発—

小方 朋子・木下 博美*

(特別支援教育) (教育学部附属特別支援学校)

760-8522 高松市幸町1-1 香川大学教育学部

*762-0024 坂出市府中町字綾坂889 香川大学教育学部附属特別支援学校

An Effort for the Improvement of Teaching Practice at the Kagawa University Affiliated School for Special Need's Students

Tomoko Ogata and Hiromi Kinoshita*

Faculty of Education, Kagawa University, 1-1, Saiwai-cho, Takamatsu 760-8522

*The Kagawa University Affiliated School for Special Need's Students, 889, Aza Ayasaka Fuchu-cho, Sakaide 762-0024

要旨 本研究は、附属特別支援学校における教育実習において、教師としての資質・能力、特に実践力を身につけるために、実習プログラムの検討を行い、指導案作成や教育実習後の評価を中心に指導を改善した。今後の課題は、さらに学生らが実践力をつけるために、より教育現場を意識し、具体的にポイントを絞った演習や教育体験を実習後にどう組むかであると思われる。

キーワード 教育実習 事前事後指導 実習プログラム 特別支援学校教諭免許状

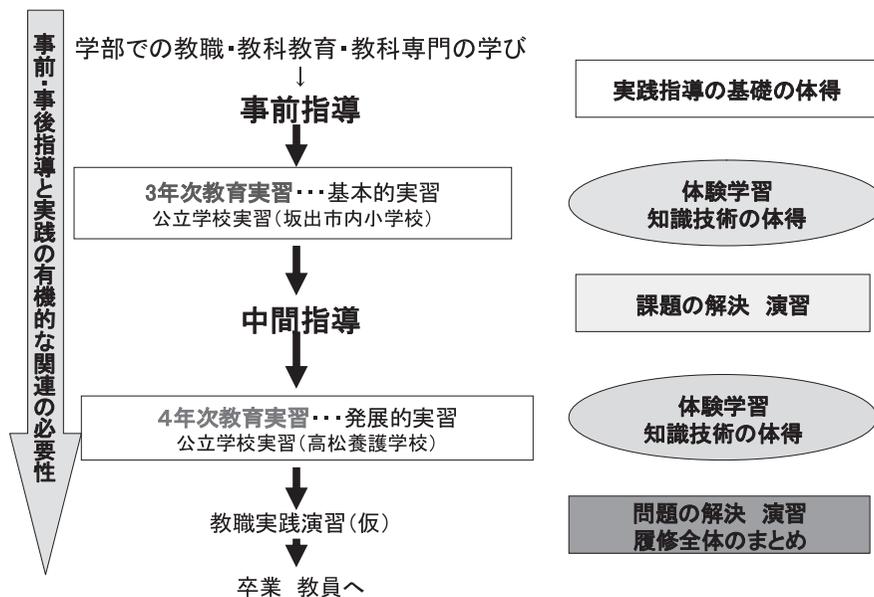
1. はじめに

本研究の目的は、本学部附属特別支援学校における教育実習において、教師としての資質・能力、特に実践力を身につけるため、実習プログラムの検討や指導の改善によって、今後の教育実習の在り方を考えるものである。今後、卒業前に必修化される「教職実践演習(仮称)」を見据えながら、学生への系統的な指導のために、学部との連携の在り方を探っていきたい。

本学では、特別支援学校教諭免許状取得が卒業要件となっている特別支援教育コースの学生は4週間、卒業要件ではない副免の学生は3週間、附属特別支援学校において教育実習を行う

ことになっている。特別支援教育コースの学生は、他コース領域の学生とは異なり、2回にわたって附属特別支援学校で実習を行う。基礎免許状として、3年次の9月にそれぞれのサブコースに従って小学校もしくは中学校の教育実習を経て、10月に2週間、翌年度の5月に2週間の計4週間である。

3年次の2週間の実習を基礎的実習と捉え、教育活動の基本的な部分を意識しながら知識技術の体得を目指すことを目標とし、その成果と課題について実習後指導を受け、4年次の実習に臨むという流れである。



資料1 特別支援学校における教育実習の流れ

主免の実習生は特別支援教育コースの学生のみということもあり、以前より学部の特別支援教育コースの教員と附属特別支援学校の教員の間で、事前の情報交換や、実習時の事故等の解決、中間指導の協力など、かなり細やかな連携をはかってきた。

平成22年度入学生から必修化されることになっている「教職実践演習（仮称）」は、教職課程を通じて身につけるべき資質能力の最終確認であり、教員養成の総仕上げの意味を持たされている。教職課程の中で核になるのはやはり教育実習であり、その事前指導及び事後指導は教職課程において重要なものである。この「教職実践演習（仮称）」が導入されるに当たって、もう一度教育実習の事前事後指導を見直し、これまでより系統的でより充実した教育実習およびその事前事後指導を目指して、附属特別支援学校と特別支援教育コースが連携し、いくつかの試みを実施した。

2. 教育実習生の感じる困難さ

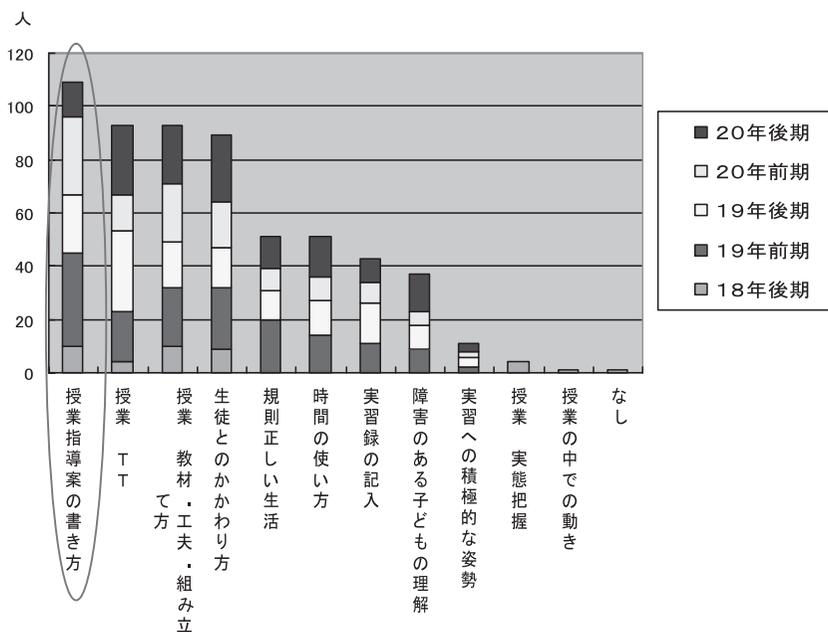
より質の高い実地教育の場を提供できるため

の事前事後指導についての検討を進めていく上で、まずは実習の当事者である実習生の意見を聞く必要があるのではないかと考え、平成18年度より、毎年実習の初日と最終日にアンケートを実施した。

この図からわかるように、「授業指導案の書き方」について困ったという回答が多く、ついでTTにかかわることや、授業の組み立て方に関すること、生徒との関わり方などが多くなっている。

確かに、実習生達は実習期間2週間の中で、最後の公開授業の指導案作りに追われ、附属の教員が本来学んでいってもらいたいと思っている学校教育全体を見渡せるような体験、学級指導、生徒理解、特別活動など、教師として必要とされる資質・態度・能力を伸ばす体験を得るに至っていないのではと感じられた。

この結果をもとに附属特別支援学校では検討を重ね、学生の困難さ＝指導者のニーズであり、実習は短期間ではあるが、その中で学校教育全般を見渡せるような体験を提供したい、「授業」実習ではなく「教育」実習である（公開授業に向けた指導案の作成指導に迫られるよ



資料2 実習において困難を感じたこと

うな実習にしたくない), 授業の構成や指導案の作成について学部との連携強化が必要という認識に至り, 次のような改善を行った。

3. 指導案作成・授業構成力育成の手だて

① 教育実践演習(事前指導)での演習の時間の増加

② 実習直前に学部教員による指導案の書き方指導の実施

8月末に教育実習直前の学生達を集め, 学部の担当教員による特別授業を行った。この中で, 学生達はそれぞれ実習で配属される学部(小学部, 中学部, 高等部)にあわせて, 1つの単元を想定し, 実際に指導案を書いてみるという演習を行った。実際はどの授業を担当するかまだ決まっておらず, 児童生徒の実態も全くわからないまま状態であるが, とりあえず指導案の単元観, 題材観, 指導観や留意点など, まず箇条書きにして, その後文章化してみた。

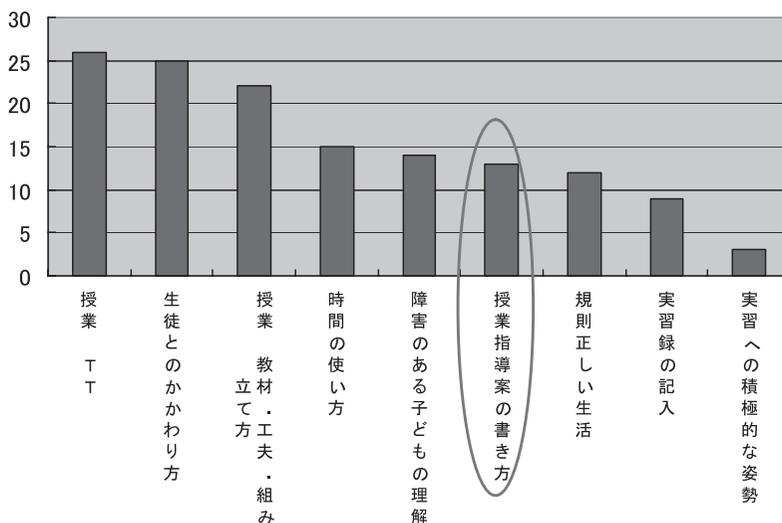
③ 研究授業を使つての演習の実施

実際に附属教員による研究授業を参観する前に指導案をじっくり読む時間をとった。その指導案は一部穴あきになっており, 実際に授業中の子どもの姿や支援の様子を見た後, いったいどのような意図を持った支援だったのかを考えるとというものである。これにより, 見るポイントが絞られ, 実習生たちは熱心にメモを取りながら見る事ができていたように思われた。

これらの試みの後に教育実習を行った平成20年度の実習生に対するアンケートでは, 指導案作成に困難さを感じたと回答した学生が減少した。教育実習後の附属教員からも, 例年より指導案作成に割かれる時間が少なかった, 困難が減少したという感想がきかれた。今後これらの指導を続け, 経過を見ていきたいと考えている。

学習活動	援助活動	
2 作業をする		
<p style="text-align: center;">マグカップ作りグループ</p> <p style="text-align: center;">T 1, <B男, I男></p> <p>(1) 粘土をもらう</p> <ul style="list-style-type: none"> 正しく依頼をする態度を養うために、B男、I男、H男、H女が、粘土を取りに来たときに「粘土をください」と言えるよう促したり、適切な表現でない時にはやり直しの場をもったりする。B男とI男にはそれぞれの場面で正しく指導者に報告や依頼ができるように、モデルとなる語型を記入したプレートをT1が用意する。 <p>(2) 丸めた後、平らに伸ばす</p> <ul style="list-style-type: none"> H女がスラブローラーにかけられる厚さに伸ばせるように、T3が指で粘土を凹まして、その凹みが見えなくなる厚さまで手の平で伸ばすことを伝える。 H男が自力で粘土を目標の大きさまで広げられるように、T3は <input type="text"/> <input type="text"/>。 H男が自分から依頼や報告をして作業を進められるように、T3はVOCAの用意や指さし、間接的な言葉かけをする。 自己中心的な報告をしがちなB男やI男には、T1が <input type="text"/> <input type="text"/>。 <p>(3) スラブローラーで伸ばす</p> <ul style="list-style-type: none"> 指を詰めず安全にスラブローラーが使えるためにT1（またはT3）が生徒の手や指の位置に配慮して支援にあたる。 模様作りの場面では、できあがりのモデルを参考にしながら3種類の葉から選択できる場面を用意することで、本人の思いを表現できるようにする。 	<p style="text-align: center;">皿作りグループ</p> <p style="text-align: center;">T 3, <H男, H女></p>	<p style="text-align: center;">粘土ちぎりグループ</p> <p style="text-align: center;">T 2, <E男, D女></p> <p>(1) 粘土を小さくちぎり、土練機に投入する</p> <ul style="list-style-type: none"> E男には、決められた手順で作業を繰り返し行うことで、自信をもって作業活動に取り組めるようにする。 E男には、両手を使って粘土を棒状に伸ばしたり、切る目印を入れたりすることで、作業工程の確立と自主的な準備の場とする。 粘土板に数字を記入しておくことで、B男が粘土を転がし伸ばす数や、仕上がりの量が分かりやすいようにする。 仕事量を評価するために、10本の粘土棒作りの作業を用意し、終了すると「できました」の報告ができるように、口形を示し、発語を促す。

資料3 穴あきの指導案



資料4 平成20年度後期実習生の感じた困難さ

4. 事後指導（中間指導）

教育実習に関する指導のもう一つの柱は事後指導である。主免の実習は3年の秋の2週間と4年の春の2週間であり、2つの期間に分かれている。よってこの2つの実習を結ぶ指導は学生達の学びにとってとても重要なものになる。

学生一人一人の課題を明らかにし、それを解決して次の実習につなげるために、従来から行っている、実習録による指導や「障害児教育指導論」での授業分析に加えて、個別に指導教員から担当実習生に対してコメントを返すことと、評価の項目を実習生に返すことにした。

「障害児教育指導論」は第1回目の特別支援学校の教育実習を終了した学生が履修する3年次後期の授業科目である。実習生による研究授業のビデオを使って授業分析を行っている。この授業においては、授業を見る視点の明確化、授業を作る視点の明確化、グループ討議による授業に対する質問事項の整理の仕方、課題の整理の仕方、授業検討会を体験することなどを目的としている。また附属特別支援学校教諭に授業へ参加してもらい、実際に解説してもらったり、学生からの質問に答えてもらったりしている。

さらに指導教員から実習生それぞれの成果と課題を次のような記述で渡すことにした。以下のように、よくできた点と次回の実習で改善したらよいという点を指摘している。

「授業に対して、様々なアイデアを出すことができました。子どもの立場に立って考え、一つ一つ実現していこうと努力する姿がありました。

感性豊かな心で、子どもの反応をキャッチするところはすばらしいです。常にアンテナを巡らせ、見逃さないでおこうとする姿勢は今後とも続けていってください。

授業中と休み時間の区別をつけてみましょう。例えば言葉遣いです。意識して区別することができるになるとメリハリのある授業へと変化していくと思います。」次に評価について工夫した点である。附属特

別支援学校では、教職に必要な知識、技能、態度について、具体的な到達目標や期待する実践力を示す61項目をたてている。実習中の生活態度から授業参観、授業でのポイント等、期待する実践力などからなっている。特別支援学校は小学部・中学部・高等部それぞれの特色があり、生徒の実態等が様々で、評価基準表というものが作りにくい現実がある。しかしその中で公正に評価をするため、多面的総合的に評価するために作成することになった。

またこの評価表は実習生にも示され、彼らは実習後その評価表に従って自己評価を行う。これは実習中に漠然とした指示を与えるよりも、これらが大事なポイントであると具体的にわかりやすく努力点や配慮点を示すことが実習生に伝わりやすいと考えたからである。何をどう頑張ったらよいかわからない実習生に具体的な項目が示されたことは大きい。実習の評価はこれらと公開授業の評価と合わせた形で決定される。このように評価項目が細かに決められていることによって、指導においても実習生を評価することにおいてもできるだけ客観的にできるようにされている。資料5はその一部である。

学習指導

授業までの取り組み			
32	授業の教科や題材が進んで決定できましたか		
33	子ども理解のための観察が丁寧ですか		
34	普段の生活の中で子どもたちのかかわりを大切にしていますか		
35	指導者に進んで質問をしたり、指導を受けたりしていますか		
36	T1としてサブティチャーとの連携を十分とっていますか		
37	細案をたて細かな点まで教材研究ができていますか		
38	指導案と教材の用意、授業の打ち合わせが前日までできていますか		

実地授業・事前授業・採点授業			
39	適切な題材(単元)ですか		
40	適切な目標ですか		
41	授業の流れが適切ですか		
42	援助活動の書き方に気をつけていますか		
43	工夫された資料や教具が置かれていますか		
44	教材の提示の仕方に意図がありますか		
45	思考を練る、または促す発問や助言ができていますか		
46	声の大きさ、間のとり方が適切ですか		
47	子どもの反応を授業に生かしていますか		
48	一人ひとりの子どもを授業に引き入れていますか		

資料5 評価表の一部

4 年① 全教員による公開授業採点・・・40点（最低点20点、標準点30点
10項目の観点で、各項目2点で採点し、最低点に加点する。

	評 価 観 点	評 価
1	適切な題材（単元）、また適切な目標であるか。	0 1 2
2	授業の流れは適切か 援助活動に細かい配慮があるか	0 1 2
3	工夫された資料・教具が整えられているか また意図のはっきりした提示の仕方であるか	0 1 2
4	思考を練る（促す）発問・助言であるか 声の大きさ、問のとり方は適切か	0 1 2
5	子どもの反応を授業に生かしているか 一人ひとりの 子どもを授業に引き入れているか（能力差への配慮は 適切か）	0 1 2
6	学習の成果を自らが確認する（満足感、成就感を体感 する）場面が設定されているか	0 1 2
7	T-Tの役割が明確になされているか （一人授業の場合は「777」）	0 1 2
8	子どもの管理（学習の態動作り等）がきちんとでき ているか	0 1 2
9	真剣な態度で取り組んでいるか	0 1 2
10	分かり易い学習指導案（文章表現、誤字・脱字等）で あるか	0 1 2
	合 計	点

資料6 公開授業評価表

5. 副免の実習について

副免の実習生は3週間の実習期間の中で最初の2週間は主免の授業のT2やT3になることが多く、授業観察や教材づくりが主となってしまふ。2週間を2回実習する主免とはやはり同じようなことはできず、また当然のことながら、特別支援学校の教員になるわけではなく、小・中学校の教員志望である。よって副免の実態に応じた実習を考えていく必要がある。今回改善した点は、それぞれがまず自分のテーマを決めて3週間の実習を行い、それをもとにレポートをまとめるという課題を課したことである。テーマには次のようなものがあった。

- ・ 個別の児童に配慮した一斉学習の授業の手立て～小学部・遊びの指導を事例に～
- ・ 通常学級に特別な支援が必要な子どもがいた時の支援方法について～特に、E女の日常生活の支援に着目し、そこから指導と支援を考える

- ・ 中学部1組Sさんの様子と支援について～公立中学校へと生かせるもの～

各自がテーマを決めたことで、学びたい課題がはっきりし、中には通常学級にいる特別な支援を必要とする子どもへの対応を特別支援学校の実習から学ぶことや、一斉指導の中で個別の児童への配慮をどう考えたらよいのかなどを学べたものなどが見受けられた。

6. 今後の課題

以上、教育実習の事前事後指導について新たな検討を加え試みてきたことを述べてきた。現状では3年次の実習後の指導は行われているが、4年次の実習後の指導については十分なことができていない。

しかし、卒業後教職に就く予定の学生にとっては、4年次の実習後に、より教育現場を意識し、具体的にポイントを絞った指導が必要である。平成22年度入学生から導入される「教職実践演習（仮称）」においては、教育実習に関することも含めて学生個々の成果と課題を把握し、どのように演習などを組むかが大切になってくるのではないかと思う。

付記：本研究は平成20年度学部教員と附属学校教員による共同研究プロジェクト研究費の補助を受けた。